

エリヤはアハブ王の妻で強い偶像神バアルの信仰を持つイゼベルによって、命をねらわれるようになりました。そこで、エリヤはベエル・シエバを経て、荒野への道を取り、さらに40日40夜歩いて、神の山ホレブに着いたのです。

### 1. ほら穴の中のエリヤ (9~10節)

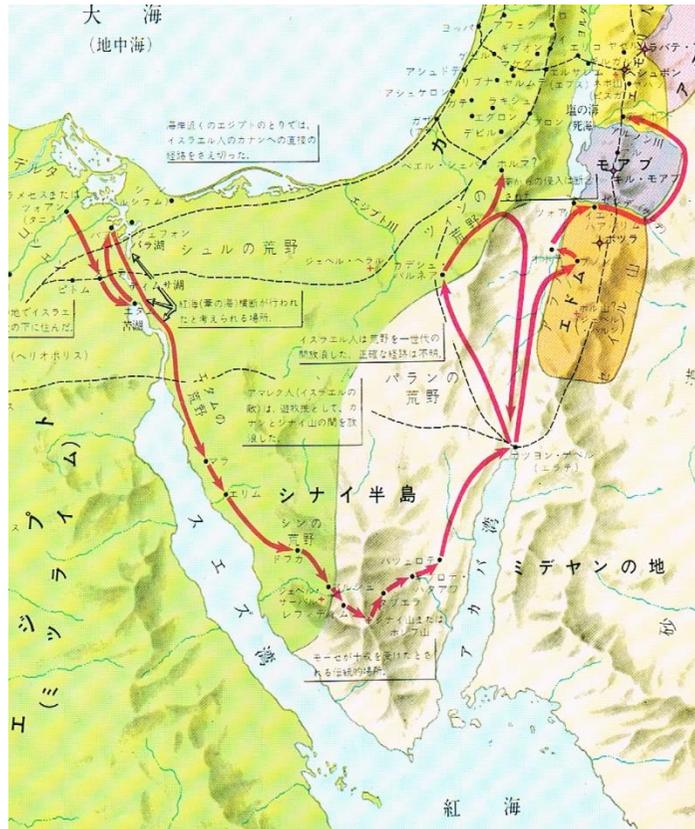
①ほら穴に入り (9)「彼はそこにあるほら穴に入り、そこで一夜を過ごした。すると、彼への主のことばがあった。主は『エリヤよ。ここで何をしているのか』と仰せられた。」エリヤはホレブにあったほら穴を休みの場所にしました。そこで夜の眠りをしたのです。ほら穴はかつてオバデヤがアハブの手から預言者たちをかくまうのにも用いたように、不便であっても守られた空間であったのででしょう (18:13)。そこで、主がエリヤに語りかけられました。「エリヤよ。ここで何をしているのか」。主が直接に語りかけられた例としては、モーセに対して (創世記 3:4-5)、少年サムエルへの語りかけ (Iサムエル 3章)、イザヤを預言者に導かれた時 (イザヤ 6章) などがあります。それらは、彼らの人生にとっては節目となるような大きな出来事でした。今ここで、エリヤに言われた言葉は単に何をしているのかを問われているというよりも、神との関わりの中で、いかに生き、いかに歩み、事柄に対処しようとしているのかの、神を信じる基本姿勢を問われているように考えられます。

②契約を捨てた民 (10)「エリヤは答えた。『私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。』」エリヤの答えは「万軍の神である、主に熱心に仕えてきた」ということでした。しかし、彼にはやりきれないことがありました。それは、イスラエルが、アハブ王の下で、主との契約をないがしろにし、主にささげる礼拝を軽んじて、主への祭壇をこわし、あまつさえ預言者たちは剣で殺されたという事実です。その時に、オバデヤが一定の預言者たちの命を助けたことは18章にある通りです。

③いのちを取ろうと (10)「『ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。』」エリヤは自分の命が守られて、そこにあることを感謝しつつも釈然としないのです。おまけに、エリヤ自身が付け狙われていて、風前の灯とも思われ、それを伝えたのです。

### 2. 大風、地震、火にも (11~12節)

①外に出て (11)「主は仰せられた。『外に出て、山の上で主の前に立て。』」すると主は、ほら穴の外に出るように命じます。そして、ホレブの山の上に行って、主の前に立てと言われるのです。今、語ってくだ



さっているのは主ご自身ですが、あえて山の上で主の前に立てと言われるのは、隠れた場所ではなく、表に出て主と相対せということでしょうか。

②主が通り過ぎ (11)「すると、そのとき、主が通り過ぎられ、主の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも主はおられなかった。」ところが、主は時を移さずに、そこを通り過ぎられたのです。エリヤがほら穴の外に出るより前に、事が始まったのです。つまり、主の前で、激しい大風が吹いて、山々にぶつかったのです。岩々が砕かれるほどでした。ところが、その風の中には主はおられなかったというのです。また、地震が起き、大地は揺さぶられたのです。ところが、その中にも主はおられなかったと。風や地震といった天変地異の事態が起こされていても主はそこにいらっしやらないとは。いったいどういうことでしょうか。

③主はおられなかった (12)「地震のあとに火があったが、火の中にも主はおられなかった。火のあとに、かすかな細い声があった。」う。さらに地震の後には火がもたらされたのですが、そこにも主の気配はなかったのです。ところが、その後、主のかすかなる声もたらされたのです。

### 3. ほら穴の外のエリヤ (13~14)

①外套で顔を覆い (13)「エリヤはこれを聞くと、すぐに外套で顔をおおい、外に出て、ほら穴の入口に立った。」主の声であることがわかると、エリヤはすぐに外套で顔をおおった、とあります。それは「人はわたし(神)を見て、なお生きていることはできない」(出エジプト 33:20)とあるとおりです。モーセも燃える柴のなかに主の御存在を見たときに、顔を隠した(出エ 3:6)とあります。イザヤは「ああ、私は、もうだめだ。・・・万軍の主をこの目で見たのだから」(イザヤ 6:5)と言っています。エリヤは恐る恐る、顔を覆いながら外に出て、ほら穴の入口に立ったのです。

②主の声が (13)「すると、声が聞こえてこう言った。『エリヤよ。ここで何をしているのか。』」すると、声が聞こえてきました。ほら穴の中にいた時と同じ内容でした。「エリヤよ。ここで何をしているのか」。同じ内容でも、それを受けるエリヤにしてみると、ほら穴のなかでは、木刀で相対していたのが、今回は真剣で相対するような心地であったと思われます。

③私だけが残り (14)「エリヤは答えた。『私は万軍の神、主に、熱心に仕えました。しかし、イスラエルの人々はあなたの契約を捨て、あなたの祭壇をこわし、あなたの預言者たちを剣で殺しました。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを取ろうとねらっています。』」この答えもほら穴にいた時の内容と全く同じなのです。つま

り、①自分は熱心に万軍の主仕えてきた。②イスラエルの民は主との契約を捨てた。③イスラエルの民は主なる神のための祭壇をこわした。④イスラエルの民は預言者たちを剣で殺した。⑤自分だけが残った。⑥彼らは自分のいのちを付け狙っている。内容は全く同じですが、後には引けないエリヤが、神の前に訴えた心情は、命がけであったといえるでしょう。ここまで来て、エリヤは進むべき方向が確立するようになったのです。

### 《結論》

今朝の聖書箇所において、エリヤは二回、「エリヤよ。ここで何をしているのか」と尋ねられています。一度はほら穴の中において、もう一度はほら穴の外の入り口付近においてでした。答えている内容は、まったく同じなのです。それでは、双方に違いはあるのでしょうか。

それは単に主なる神が、エリヤの答えを確認するためであったと理解する向きもあるかもしれませんが、しかし、ここでは明らかに二つの応答には状況が違います。まず第一には、一回目はほら穴の中でした。そして二回目はほら穴の外に出させられた後でした。それに一回目と二回目の間には、主が通り過ぎられて、大風が吹いて岩々も削られ、地震が起きて地は揺さぶられ、火が出て燃やされるものは燃えてといった、自然の脅威があったのです。そうして大事があった後です。それに、その直後に主のかすかな細い声が聞こえたのです。エリヤは思わず、外套で顔を覆うようにして、ほら穴の外に出て、その入り口にたったのです。そこで、主は改めてエリヤに「エリヤよ。ここで何をしているのか」と問われているのです。これは同じ質問であっても状況は異なります。

エリヤは一回目に答えた時、心は弱っていたと思われそうですが、預言者としてそれなり真剣であったと思います。だからこそ、語られた内容は二回目が同じになるほどに、まとまっていたのです。しかし、二回目に問われて答えた時には、天変地異があった後に主の細い声が聞こえてきたこともありました。そこで、エリヤはさらに真剣に答えさせられたと思われそうです。しかし、答えの内容は全く同じでした。

ここから何が言えるのかということと考えますと、私たちの祈りの内容が全く同じであっても、その内なる神への向かい方や意識が深まっていることがあるということです。そして、主なる神はエリヤに対してもそうであったように、私たちが少しずつ主の前の意識を深めていくように願われているということです。私たちは、どこまでいっても、罪深い存在であるということにおいては確かなので

す。しかし、いつまでもほら穴の中に閉じこもっていてよいのかというところではないと思われます。主がエリヤに出来事を起こすまでにして、ほら穴の外に立たせられたように、私たちもほら穴の外に出るのを待っておられると思われます。

人の前に自らをさらけ出すというよりは、神の前に出ることです。そして「ここで、何をしているのか」と問われたなら、ありのままをお伝えしていくのです。それを主はお喜びくださると思われます。そこに、主とのより深い関係が生まれてくるのです。御言葉による導きをいただき、主なる神に祈っていくのです。そのような主とのお交わりこそ、私たちにとって本当の平安と喜びをいただいでいく道ではないでしょうか。また、「御霊によって歩みなさい」という今年の御言葉に近づいていくことになるのではありませんか。「主よ試み、受くるおり、祈りたまえわがために、心恐れ感う時も、愛の御顔むけたまえ」（讚美歌 316 の一番）と歌っていきましょう。